

タイ情報

図書館

公文書史料は基本的にタイ国立公文書館とタイ国立図書館に所蔵される。(一部参照の必要がある外交文書など、省庁の資料室に残されているものもあり。)

外国人研究者は基本的に National Research Council of Thailand を通して利用許可を得る。(公文書館の方は一時的短期利用であれば NRCT の許可なくして可能と聞く)

タイ国立公文書館 (<http://www.nat.go.th>)

基本的に 5 世王期(チュラーロンコーン王の治世 1868-1910)以降の文書が保管されている。(だいたい 1950 年代くらいまで、一部省庁によっては 1970 年代初頭の文書の一部も入っている。) 省庁別にカタログが作成され、一部 5 世王期から 7 世王期の文書の一部は治世ごとにカタログがある。(しかし治世ごとに整理されていない文書も大量にあり、その中には 5 世王期にさかのぼる文書も含まれるので要注意)。その他、王族や政治家などが寄託した個人文書なども入っている。Folder に入っている。7 世王期末までの基本文書はマイクロ化されているが、多くの文書は現物のままである。

現物史料の複写コピー、マイクロフィルムからのプリントアウトは、依頼可能。写真撮影不可。2 階は地図・写真資料室となっている。一部デジタル化されているが、館内でのみアクセス可能。

タイ国立図書館 (<https://www.nlt.go.th/th/>)

古文書部というセクションに、基本的に 4 世王期までの公文書史料が保管される(が、一部 5 世王期の史料もあり。一サムット・コーイと称される横折本タイプのもの)。公文書以外に、年代記、文学、貝多羅葉に刻まれた経典、仏教絵図や地図なども所蔵される。一部はマイクロフィルム化済。これらの所蔵史料の閲覧には NRCT の許可以外に国立図書館において、カタログをみたうえで必要な資料をみるための許可申請必要。(許可が出るまでに 2-3 週間かかり、許可された以外の資料をみることは困難。)

新聞や雑誌は 1 階の新聞・雑誌室で閲覧可。古いものはマイクロ化。両機関ともに Facebook あり。貴重書コーナーあり。一部はデジタル化。

チュラーロンコーン大学附属図書館 (<https://www.car.chula.ac.th>)

タマサート大学附属図書館 (<https://library.tu.ac.th>)

(参考：カセサート大学附属図書館 (<http://www.lib.ku.ac.th/web/index.php/th>))

外部者：20 バーツで一日閲覧可(外国人はパスポート要)。年会費(+保証金)で貸出可貴重書セクションがあり、19 世紀末以降に出版された刊本所蔵。最近ではデジタル化公開にも力を入れている。(チュラーロンコーン大学のほうが充実している。)なお、タイには葬儀の際に一族の系譜や故人にゆかりの歴史文書などをあわせて出版する慣行があり、歴史研

究にも利用されることがある。以前は Bowonniwet 寺院の図書室が多くを所蔵していたが、最近タマサート大学に寄贈されたと聞く。

学位論文へのアクセス

タマサート大学：電子版のオープンアクセス化

(<http://beyond.library.tu.ac.th/cdm/search/collection/thesis>)

(製本版のみの学位論文検索は、同大学図書館の検索か OPAC 利用)

チュラロンコーン大学：利用登録後、学外から電子版にアクセス化

チェンマイ大学、マヒドン大学：学内からのみ電子版にアクセス化

本屋

CU Bookstore (チュラロンコーン大学) (<http://www.chulabook.com/home.asp>)

オンライン購入可能

Asia Books (<https://www.asiabooks.com>)

英語書籍がメイン

オンライン購入可能

紀伊国屋(<https://thailand.kinokuniya.com>)

オンライン購入可能

Matichon Bookstore (<https://www.matichonbook.com>)

オンライン購入可能。文学書、修論・博論も出版

Sriwong Bookstore

チェンマイの老舗書店

Silkworm 出版 (<https://silkwormbooks.com>)もやっている。

チャクラポップ

Imperial World Lao Phrao5F。アイススケート場の近くで、ピース・テレビの手前。

赤シャツ系の出版物販売

オンラインの古本屋は存在する。店舗型は発展せず。

Book Fair

4月と10月にバンコクで開催。主要な出版社が出店。

新聞

Matichon (<https://www.matichon.co.th/home>)

クオリティが高い。

Thai Rat (<http://www.thairath.co.th/home>)

部数が多い。全方位的なスタンスを取っている。

Prachathai (<https://prachatai.com/english/category/news>)

調査報道系

Bangkok Post (<https://www.bangkokpost.com>)

英語紙

The Nation (<http://www.nationmultimedia.com>)

保守化、王室寄り過ぎでジャーナリストの流出。新自由主義的で反タクシン

Khao Sod (<https://www.khaosod.co.th/home>)

Matichon 系列でより急進的。英語版あり。

オンライン・ジャーナル

Isaan Record (<https://isaanrecord.com/home/>)

東北タイ（赤シャツの拠点）の政治社会運動情報

雑誌

Matichon (<https://www.matichonweekly.com>)

共同経営をしており、ワンマンではないので 90 年代のバブル期にも生き残った。他のメディアは、ワンマン経営で、テレビなどに進出して軒並み失敗した。

Fah Diew Kan (Same Sky)

雑誌では、左翼系の雑誌。

年に 2 回（4 回→3 回→2 回と刊行頻度変更）出版している。入手先は、bookmoby（バンコクアート&カルチャーセンター4 階）や Suksit Siam（ラーチャボピット寺院付近）などの独立系書店。Book fair でも版元がブースを出しているので入手可能。

国家による検閲・監視、フェイクニュース

・政府が監視しているのは、オンラインでの政府批判である。Facebook はよく監視されている。ただし、2018 年に入ってから、国王の指示もあり、起訴はされても不敬罪で逮捕されたケースはない。より軽い刑にしている。そうすることで、王室批判をかわそうとしている。

・プラユット首相批判はできるが、煽動罪やコンピューター犯罪法での犯罪で逮捕されるケースがかなりある。

・軍のサイバー部隊のようなものが監視している。

・フェイク・ニュースというより、政府の情報も真偽が定かではない。

・南部では、外国人はすべて監視されているという情報がメディアに流れたことがある。

・外国人による調査は、王室絡み以外は問題ない。